

優秀賞

「わたしとじじ」

登米市立北方小学校 三年 坂部 里來さかべ りな

「じじ、今日三時三十分ね。」

毎朝の、わたしの日かです。わたしは、学校に行く前に、南三りく町に住むじじに電話します。じじは、お母さんの仕事が休みの日以外、毎日わたしを学校にむかえに来てくれます。じじは、ごはんもいっぱい食べる声も大きいし太っています。とても元気なので、じじがむかえに来てくれるのは、あたり前のことだと思っていました。

ある日、ばばがひざが悪くなつて歩くのが大へんになりました。その時、お母さんが、

「ばばもじじも、もう七十三才だからね。」

と言つているのを聞いて、けつこう年なんだと思いました。

(年をとるつて何だろう。)わたしも一年に一度、たん生日が来ると一つ年をとります。小さい時からできることが少しずつふえてきました。でも、お母さんは、年をとるとできなくなることもわされることも、ふえてくると言います。お母さんに、

「じじもばばも、できないことがふえて、りなのこともわすれちゃつたらどうする。」

と言われました。わたしは、

「とてもさみしいことだけど、いつもわらつて自分の名前を二人にさげび続けたい。」

と言いました。年をとるつて時間を重ねることで、たくさん

のうれしいことや時には悲しいこと、わたしがまだ知らないことをけいけんしているのだと思います。だから年をとるつてすばらしいことです。じじが毎日、わたしをむかえに来てくれることは、けつしてあたり前のことではないということに気がつきました。だって、じじも年を重ねているのだから。わたしは、今じじにしてもらつてることをわすれずに、いつしょにすてきに年を重ねていきたいです。そして、じじができるないことがあつたら手つだつて、わたしをわすれちゃつたら大きな声で、

「りなんだよ。」

と教えてあげるんだ。